関西自然保護機構会誌 29（2）：125－126, 2007

シンポジウムの趣旨について
雑木林の自然史－ナラ林の生態系を考える－

神戸女学院大学環境・バイオサイエンス学科　野　嵜　玲　児
大阪市立自然史博物館　佐久間　大　輔

Natural history and ecology of summer-green oak（*Quercus*）forest of Japan. Reiji Nozaki（*Department of Biosphere Sciences, Kobe College*）and Daisuke Sakuma（*Osaka Museum of Natural History*）

里山や水辺など身近な自然を対象とした保全活動が，近年各地でさかんに行われている。とくに，2002年に出された「新・生物多様性国家戦略」で，重要課題の一つに位置づけられた里地里山生態系の保全は，市民やNPOによる各種の保全活動のみならず，村おこしや新たなビジネスの拠点とさえなっている。こうした現場では，生物のすみ場所の確保や生態系の保全・管理方法，管理システムの構築などが優先課題となるが，なぜこれらの生態系や生物を保護・保全するのかという点に関しては，必ずしも共通の理解があるわけではない。里地里山を構成する雑木林（ナラ林）や採草地，水田畦畔などの二次的自然は，人の手によって育まれてきた自然であるが，それ自身，固有の歴史と独特の生物相をもっている。人類による二次的自然への働きかけは，日本列島では長く見積もってもたかだか数千年であるが，雑木林や草原の生物自身は数十万年あるいはそれ以上の歴史を持っていることを忘れてはならない。また，レッドデータブックの整備はこうした二次的自然に多くの絶滅危惧種や希少種が存在することを明らかにしたが，これらの希少種の大部分は人里の周辺にかつては普通の種であり，一部には防除の対象とされていた種さえ含まれる。生物を絶滅の淵に追いやったのも人間であり，それらを懸命に保護しようとしているのも，また人間である。里山の生物や生態系が保全対象としてさかんに取り上げられる背景には，里山の荒廃を引き起こしたのと根を同じくする，自然に対する人間の価値観の遷り変わりが関与している点にも留意する必要があろう。したがって，里地里山の生態系を将来にわたって保全するためには，これらの二次的自然に対する十分な生態学的理解とその価値に対する科学的な評価が必要である。

関西自然保護機構では2002年にも「里山の今と，これから」と題したシンポジウムを開催し，里山の保全や管理にまつわる議論を行っているが，今回はとくに，里山生態系の中核をなすナラ林を科学的にとらえることに焦点をあててみたい。コナラやクヌギ，アベマキなどの落葉性ナラ類を主とする関西の雑木林は，多くの種類のチョウや甲虫，野鳥などを育む重要な生態系である。しかし，ナラ林に対する学術的研究はカシ林やブナ林などの気候的極相に較べると立ち遅れており，その植生学的な位置づけや自然保護的価値に対する評価も十分には定まっていない。そこで，本シンポジウ

関西自然保護機構業績　第420号

ムでは，ナラ林の生態系を自然史的に読み解くと共に，その生態的特性を考察し，保護・保全のための理論的な礎を探ることを目的とした。

シンポジウム「雑木林の自然史－ナラ林の生態系を考える－」は2007年6月24日に大阪市立自然史博物館において，KONCと大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター共催のもとに開催され，以下の講演と総合討論が行われた。コーディネーターは，佐久間と野嵜が務めた。当日の参加者は，KONC会員および講師等を含めて総計85名であった。シンポジウムに参加していただいた，京都府立大学大学院の高原光博士および小林正秀博士，九州大学大学院の小田切顕一博士に厚くお礼を申し上げます。

プログラム

（於：大阪市立自然史博物館講堂　13：00－17：00）

ナラ林の自然史と二次的自然の保護：野嵜玲児（神戸女学院大学環境・バイオサイエンス学科教授）

最終氷期以降のナラ林の分布変遷－気候変動と人間活動の影響－：高原　光（京都府立大学大学院農学研究科教授）

菌類からみたナラ林：佐久間大輔（大阪市立自然史博物館学芸員）

ナラ林を脅かすキクイムシ－ナラ林の大異変－：小林正秀（京都府立大学大学院農学研究科特別講師）

里山のナラ林に生息するミドリシジミ類：小田切顕一（九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者）